

ホロコーストの物語

——占領期ドイツにおける記憶と表象

高橋 秀 寿

1 強制収容所の解放とホロコーストの物語

一九四四年七月二三日、ナチス強制収容所のマイダネクがソ連軍によって解放された。その収容者は大半がすでに撤退されており、そこにはわずかな生存者とともに、巨大埋葬地、ガス室、犠牲者の遺留品が納められた倉庫などが残されていただけだった。その後、ソ連軍はベウジェツ、ソビブル、トレブリンカの強制収容所に到達するが、そこはSSによってすでに破壊されていた。そして一九四五年一月二七日に約三千人の生存者とともにアウシュヴィッツが解放された。ソ連軍はマイダネク強制収容所を報道し、そこに西側報道陣も招いたが、ドイツ国内の強制収容所が西側連合軍によって解放されるまで、アウシュヴィッツに関する報道はほとんどなされていない。西側もソ連側の報道をさほど信用していなかったようであり、アメリカのメディアは戦況報道に集中していた。今日ではアウシュヴィッツ解放記念日として全世界で式典が催されているその日は、当時ほとんど誰も注目しない戦争末期の一日にすぎなかったのである^①。

しかしアメリカ軍はみずから強制収容所を解放すると、その報道の価値をすばやく認識した。アメリカ軍が最初に発見した収容所は、ブーヘンヴァルト強制収容所の外部収容所であるオーアドウルフであったが、四五年四月一二日にそこを視察したアイゼンハワーは、今後どの強

制収容所も写真と映像に残すように指示したのである。その前日にブーヘンヴァルト強制収容所がアメリカ軍によって、一五日にはベルゲン・ベルゼン強制収容所がイギリス軍によって解放され、一九日にアイゼンハワーはそれぞれ二人からなる議員団と編集者の視察団を派遣するよう要請した。この派遣団は二二日にブーヘンヴァルトに到着し、五月一日にはノルトハウゼン強制収容所を訪問したあと、到着後の四月二九日に解放されたダッハウ強制収容所を五月二日に視察した^②。こうして、このような視察団や従軍報道官によってナチス強制収容所の実態が報道され、全世界がその事実を驚愕することになる。

連合軍は解放を目的にして強制収容所を占拠したのではない。その発見はむしろ偶然であり、その事態を予期していなかった。それゆえに目撃者となった兵士たちの最初の反応はまず驚愕であった。彼らが驚いたのは、戦場とは量的にも質的にも異なる死と生のありよう、つまり、餓死と衰弱死、薪のように積まれた死体、極端にやせかけた飢餓状態の生存者の姿、そして死の偏在と日常化であった。「私たちは戦闘部隊に属していた。私たちは数ヶ月もほぼ毎日のように間近で死を見てきた。でも、ここはまったく違っていた」と米軍従軍ラビのエリ・A・ボーンネンはダッハウ体験を述べている^③。

ブーヘンヴァルトを訪れた『タイム』の記者のP・ノートは「死が普通の状態になってしまったために、死に対してまったく無感覚になり、

何も、胃の痛みさえも感じなくなった」と、その死のありようのために自分の感覚が麻痺していることに気づいた。そこに彼が見出したのは理解不可能な光景だった。「ブーヘンヴァルトを理解しようとしてもどうして無理である。たとえ見たとしても、それをあなたはまったく理解することはできない。頭脳と熟練の腕を、人生と運命と思考をもった人間が、盲目の本能によってのみ生き残ろうとするような状態になってしまったことを見ることは恐ろしいことであり、理解をこえている。」^④

そして、多くのジャーナリストはこの「理解不可能」な実態を報道する任務に困難を感じた。『ニューヨーク・タイムズ』の記者のH・デニーは「ジャーナリストはこれらのことを書くこうとしたが、言葉が見出されることができず、できたとしても、その詳細な記述はあまりにもおぞましく、どこにも載せることができない」と述べ、写真もその恐ろしさを捉え切れていないと指摘した。写真は「強制収容所を訪れた後に数日間わたって鼻についていた汚物と死の悪臭」を伝えられなかったからである。^⑤

驚愕の後にこのような目撃者に生じた感情は、犠牲者への同情よりも、加害者に対する怒りと憎悪だったようである。ダッハウの目撃者となった米軍従軍ラビのD・M・アイヒホルンによれば、米軍兵たちは「驚愕の涙」だけでなく、「憎悪の涙」も流したという。そして収容所の監視員が旧収容者から殴り殺され、その肉体が裂け、内臓が噴き出した姿を見ても、米軍兵はまったく同情しなかった。「この畜生どもは殺されてもまったく仕方がないと私たちは思った。」^⑥

同じ従軍ラビのボンネンも当時、頭を占めていたのは大量虐殺の犠牲者ではなく、「死刑執行人たち」のことであったというが、それは自分が人間であることの恥辱感のゆえであった。自分もまた「人間としてダッハウに責任をもつ者の種に属している」ために、彼は収容所にさら

に足を踏み入れていくにつれて、自分が犬よりも劣っていることを感じていったという。^⑦米軍に従軍した写真家のM・バークーホワイトもまた、「私たちほとんど同じ手と足、目と心臓をもった人間」がこのようなことを行ったことを考え、人間の種であることを恥ずかしく思ったという。^⑧通常の戦争における死と生のありようをこえていたその姿を目前にして、この「犯罪」は人間の存在を問いかけるものとして感じられていた。

当初は驚愕、怒り、憎悪の感情に襲われていた米軍従軍ラビのアイヒホルンは、ダッハウ強制収容所の解放から一週間後に催したユダヤ教聖餐式での演説で、この出来事の意味を語るができるようになった。まず、アメリカ兵の「解放者」として彼は、米軍による強制収容所の「解放」がアメリカ史のミッションに基づいていることを強調した。「自由を愛する独立した人民であるアメリカ人」はみずからの自由と幸福をつねに全人類のものとして考えていたのであり、民主主義と正義と真実を破壊しようとする暴君が失脚させられていない限りは、くつろぐことはなかったのだという。こうして強制収容所での出来事は「独裁」と「暴君」の所業として理解され、その解放は「自由」、「民主主義」、「正義」、「真実」の戦士としてアメリカ人がその使命を果たした英雄物語として語られた。

そして解放された収容者は彼にとって「戦友」であった。たしかに耐えがたい苦悩と悲劇を経験したが、この人びとは「権力亡者の精神異常者」の単なる犠牲者ではなく、「破滅に甘んじることなく、使えるあらゆる武器を用いて反撃し、肉体と精神と魂とともに」戦った「勇者のなかの勇者」である。トラーにはアメリカの世界史的ミッションと類似した文言（「全世界とそのすべての住民に自由を告げよ」）が書かれているが、収容者たちはまさにその使命を実行したのであり、敵がひれ伏すことで

「神と人間性に対する皆さんと私たちの信念」は立証されたのだという。ここにおいて収容者の死と苦悩の経験は「独裁」と「暴君」に対して戦い、勝利した英雄物語として語られ、その死と苦悩に意味が付与されている。

さらにこの従軍ラビは、「抑圧された人間は誰でもその存在を戻さなければならず、戻されるでしょう。そしてそれに値する場を取り返さなければならず、そうなるでしょう」と、アメリカ軍と「海の向こうのユダヤ人兄弟」からの約束と誓いを伝えている。つまりそれは、「抑圧」から「存在」と「それに値する場」であるイスラエルを回復する約束と誓いであり、ここにおいてユダヤ人の経験はシオニズムの物語と結びつけられている⁹⁾。

アイヒホルンの演説のなかでは三つの物語——アメリカ人と収容者の「普遍主義」的な英雄・解放物語と、ユダヤ人の「特殊主義」的な国民国家樹立のための物語——が語られている。こうして、「言葉が見出される」ことができず、「理解をこえた」驚愕の出来事は、これらの物語を通して表現が見出され、理解が可能になった。しかし、理解を可能にしたその物語は人間の存在の問題をもちや問い詰めてはいない。この出来事は、「普遍主義」的であれ、「特殊主義」的であれ、その人間が帰属するナショナルな存在の問題として語られることによって、その意味が与えられているのである。

さて、この出来事はのちに「ホロコースト」と総称されることになるが、それがさまざまな歴史的な事実から成り立っていることはいうまでもない。ほかの歴史的出来事と同様に、ホロコーストもその多くの歴史的な事実、あるいは無実の取捨選択に基づく物語として構成されることによって歴史的な事件として記憶され、その意味が見出された。では、ホロコーストの記憶はどのような事実と無実によって構成され、どのよ

うな物語に基づいているのであろうか。本稿の目的は、占領期を対象にしてこの問題を明らかにすることにある。

2 アメリカと「物語」

「アメリカ兵は何のために (for) 戦っているのかわかっていないと私たちは聞かされた。いまやアメリカ兵は自分が少なくとも何に対して (against) 戦っているのかを知るだろう。」

オーアドゥルフ強制収容所を視察したあとにアイゼンハワーはこのように語った¹⁰⁾。たしかに開戦時の世論調査は、アメリカ人がドイツと戦う意味を容易に見出していなかったことを明らかにしている。四一年二月に對独伊戦争に参戦する投票があれば八六%が反対票を投じると答えており、八月にこの戦争を「私たちの戦争ではない」と四割がみなしていた¹¹⁾。開戦後の一二月でも三分の一のアメリカ市民が「何のために戦っているのかについて明確な見解をもっている」と感じていなかった¹²⁾。「パールハーバー」のような忘れてはならない地名をアメリカ人は對独戦争のためにもつていなかったのである。つまり、アイゼンハワーの発言はまさに戦争目的の事後正当化であり、ここにアメリカが強制収容所の報道に価値を見出し、ソ連がその報道に熱心でなかった理由の一つが見出されよう。アイゼンハワーが撮影を指示した解放後の強制収容所の写真と映像は、アメリカ人同胞へのメッセージでもあった。帰国したジャーナリストの視察団も、その写真と映像をアメリカ人も見るべきだと訴えた。「アメリカ人のショックが大きければ大きいほど、アメリカ人はその恐怖をリアルに実感するであろう¹⁴⁾」と。

こうして多くのアメリカの雑誌と新聞が強制収容所の写真を公表したが、まずそれらの写真が示していたのは死の異常性であった。『ライフ』

誌は四五年五月七日号で生きたまま焼かれた収容者の焼死体の写真を載せているが、ホロコーストの死者像を刻印することになったのは、餓死した骨と皮だけの死体が薪のように積み重ねられた姿であった。パーク―ホワイトがブーヘンヴァルト強制収容所で撮影した写真1^⑮は、その後も写真集などでくり返し用いられることになる彼女の「代表作」である。強制収容所の写真は同時に死の大量性も強調している。前掲の『ライフ』誌が掲載したノルトハウゼン強制収容所の写真はその典型であるといえよう。比較的整然と敷地に並べられた死体の列が階上から撮影された写真2^⑯は、遠近法的な構図をとることによって、死者の列があたかも消尽点の果てまで続いているかのような印象を与えている。

写真2ではアメリカ兵が死体の列の間を「解放者」として歩いている「英雄像」も写し出されているが、ほかの報道写真にもアイゼンハワーなど、名前と所属の明らかかな將軍がしばしば登場しており、ドイツ人の加害者もしばしば実名で写真に現われている^⑰。これに対して収容者はまったく匿名の存在である。今日にいたるまで生存犠牲者像を深く印象づけることになる写真3^⑱は四月末にブーヘンヴァルトで通信隊によって撮影され、新聞・雑誌に公表されたが、そこに写し出された収容者は、死者像と同様の姿で表象されている。つまり、従軍ラビのアイヒホルンのいう「勇者のなかの勇者」のような能動的な犠牲(sacrifice)者ではなく、「権力亡者の精神異常者」の受動的な犠牲者(victim)の姿である。デニーはそのような犠牲者像を次のように描写した。

「柵の上に横たわり、あるいはうずくまっている囚人たちは人間のようにはほとんど見えず、あるものたちは放心していた。あるものたちはしなびた顔から鋭い目で私をじっと見つめた。あるものたちは呆然と前方に目をやり、その目は何も見ておらず、その口はぼかんと開いていた。あるものたちは私に気づいて、着ていた衣服をちよっと動かし、自分の

グロテスクな奇形を見せ、少数のものが冷笑的に微笑んだ。」^⑲

報道写真の被写体となったドイツ人は収容所関係者のような直接的な加害者だけではない。連合軍は強制収容所近隣の住民に収容所の見学を強制したが、そのときのドイツ市民とその驚愕する姿も多く写し出された。後述する強制収容所の記録映画と同様に、そこに登場しているのは、空襲などの戦争体験や東部領土からの追放によって困窮しているドイツ人ではなく、豊かな日常生活を享受している小市民たちである。このようにドイツ人の市民的日常性が強調されることによって、強制収容所の超日常性とドイツ人の罪深さが際立たされることになった。また報道写真や記事のなかでは、ドイツ人がこの惨劇に関心を示さず、エゴイスティックに行動していることが強調されている。例えば、前掲の『ライフ』は「小さい子供がベルゼンの収容所の近くで死体の並んだ道を下りながら散策している」と解説を付けて、記事の冒頭に写真4^⑳を掲載しているが、『ニューヨーク・タイムズ』はこのような光景をダッハウ報道で記している。バイエルンの農民は収容所内の死体も惨事も無視して、アメリカ軍の占領の機会を略奪の「バカ騒ぎ」に利用し、「ドイツ人の子供でさえ一瞥することもなく死体のそばを走り、盗んだ衣服を運んでいった」と^㉑。

このような報道では強制収容所の罪が直接的な加害者だけではなく、このようなドイツ人全体が負っていることが前提にされている。デニーはこの「集団的罪＝責任(Schuld)」テーゼを明確に述べている。

「ドイツ人が全体としてヒトラーの罪を共有しているのだから、ドイツ人がこの惨事を行ったのだと私は主張する。もし、たった一つや二つの収容所で、囚人が餓死し、死ぬまで働かされ、屈辱を与えられ、拷問され、言われなく殺害されたのなら、…私たちはそのような残虐行為を異常な指導者個人のせいにして、その行為を例外として軽く見たかもし

れない。しかし私たちは収容所という収容所で、まったく同じ光景を恐ろしく詳細にいたるまで隅々で見出したのであって、弁明できるほどの規模ではとうていいない。^②」

ドイツ人全体がその「罪」を負っているならば、その全体に「罰」も与えられなければならないことになる。『ニューヨーク・タイムズ・マガジン』や『ライフ』はアメリカ兵の監視のもとにドイツ人が強制収容所で死体の「後始末」の「罰」を強要されている姿を載せているが、派遣団のジャーナリストたちも帰国後に次々とドイツ人全体への「罰」を訴えた。J・ピューリッツァは「ドイツ人に關して、公正であるが、とても厳しい和平条約になること」に賛成し、『ロサンゼルス・タイムズ』の編集者であるN・シャンドラーは「それが厳しすぎることはありえない」と断言。『ミネアポリス・スター・ジャーナル』の編集長であるG・セイモールは「今後二〇年間、私たちはドイツを管理しなければならぬ」と語ったのである。^③

以上のような報道においてホロコーストは、〈解放者・告発者・刑罰者としてのアメリカ人〉、〈加害者・罪人・被告人としてのドイツ人〉、〈その受動的な犠牲者〉という三者の登場人物によって展開された物語のなかで語られている。四月一六日にブーヘンヴァルトで通信隊によって撮影された写真^④の構図——薪のように積まれた死体の姿の犠牲者、それを見ることを強要するアメリカ人、見ることを強要されたドイツ人——は、この三者の権力関係とアメリカ人のホロコーストの物語を明確に写し出している。解放後の目撃者が犠牲者への同情よりも、加害者への怒りと憎悪を真っ先に感じたように、その物語はドイツ人に向かって語られ、犠牲者とその死と生はドイツ人への告発と刑罰のための被写体と状況証拠となった。犠牲者の「展示」がすでに始まっていたのである。

強制収容所の解放後に撮影された映像をドキュメンタリー映画にまとめ上げるプロジェクトは四五年二月からすでに始まっていたが、最終的にドイツ系ユダヤ人のH・ブルガー監督の下でアメリカ軍市政権によって製作された『死の碾き臼』(Death Mill / Todesmühl) が四五年一〇月に完成した。二三分のこの短編映画には英語、ドイツ語、イディッシュ語の三種のナレーションが付けられた^⑤。映画制作の本来の目的は心理戦師団の指針のなかで明確に述べられている。

「a) ナチスがその名の下で犯した特別の犯罪を上映することで、ドイツ民族がナチ党に対して憤慨するようになり、連合国占領に対するテロあるいはゲリラ活動の試みに対処する。

b) 当時そのような犯罪の遂行に暗黙に同意したことをドイツ民族に思い起こさせ、それに対する責任は免れえないことを意識させることによつて、ドイツ人に連合国の占領処置を受け入れさせる。^⑥」

前者の事態はほとんど生じなかったため、実質的に後者だけがこの映画の目的になった。「集団的罪」テーゼに基づくこの映画の流れを簡単に追ってみよう。

十字架とシヤベルを背負つて犠牲者の埋葬に向かうドイツ人男性の隊列↓解放者を歓迎し、解放を喜ぶ旧囚人の姿↓収容所内の様子・食料に群がるやせこけた旧囚人、衰弱者の救護・診断↓アイゼンハワー、カンタベリー主席枢機卿、調査委員会の視察↓殺害施設・道具、夥しい収作物↓数々の死体のありさま↓加害者(責任者、男女の看守、収容所医師)の姿↓ふたたび数々の死体のありさま↓死体の中での生存者の様子↓責任者とワイマール市民の強制見学↓ニュルンベルク党大会のシーン(『意志の勝利』)とヒトラーに熱狂して挨拶するドイツ人↓強制見学のドイツ人との二重写し↓冒頭のドイツ人の隊列。

写真報道と同じ死者像、生存者像、権力関係、ドイツ人像がこの映画

でも描き出されている。西側連合軍は「解放者」として犠牲者に歓迎され、アイゼンハワー、ブラッドレー、カンタベリー主席枢機卿などの「告発者」が登場する。ドイツ人も、ベルゲン・ベルゼンの収容所所長やハーダマー「安楽死」施設の医院長と婦長のような直接的な加害者の顔と、強制収容所の見学のために「まるでピクニックに行くかのように出かけ始め」（英語版ナレーション）、その後強制収容所の惨劇に驚愕しているワイマール市民の姿が写し出されている。これに対して犠牲者は匿名の被写体であり、英語版のナレーションでは犠牲者の国籍や民族に關してまったく言及がない。ドイツ語版でも「ヨーロッパのすべての国々、ロシア人、ポーランド人、フランス人、ベルギー人、ユーゴスラヴィア人、ドイツ人、チェコ人、すべての宗教の人々、プロテスタント教徒、カトリック教徒、ユダヤ教徒」と国籍と宗派が羅列されているだけである。

心理戦師団の指針にあげられた目的の通り、この映画の物語を貫いているのは「集団的罪」テーゼである。ドイツ人男性の集団が十字架を背負って犠牲者の埋葬に向かう冒頭シーンは、ドイツ人が「罪」を負っていることをシンボリックに表現している。また、ホロコーストと「普通の人びと」との関連を示すために、強制収容所と日常生活との密接な関わりも指摘されている。

「農民は化学肥料として何トンもの人間の骨を受け取った…、しかしそれが人間のものであるとはつきり憶測するなんて一度もしなかった…、製造業者は何トンもの人間の髪の毛を受け取った…、しかしそれが殺された女性のものであるなどは明らかに夢想だにできなかった…、強制収容所の近くに住んでいた人ひとに悪夢は一度も襲わなかった…、虐待されていた者の叫びと呻き声は風の悲しげな音であると疑うことなく信じていた。」（英語版ナレーション）「アウシュヴィッツ絶滅収容所だけ

で焼かれた人数は四百万人と見積もられている。そして、その骨は挽いて粉にされ、化学肥料としてドイツ農民に売られた。／そう、死の碾き臼は採算の取れる商売だったのだ！」（ドイツ語版ナレーション）

映画の最後の部分では、「これらのドイツ人——自分は知らなかったと言った者たち——にも責任はある。ドイツ人は——喜んで——犯罪者と狂人のなかに身を投げ出したのだ」（英語版ナレーション）と、ヒトラーへの熱狂的な支持がホロコーストを招き、その意味で直接的な加害者でないドイツ人もその罪を負っていることが示唆されている。それに続くシーンでは、ヒトラーに熱狂するドイツ人と惨劇に驚愕するワイマール市民が二重写しで映し出されるが、その場面のドイツ語版ナレーションでは主語が「ドイツ人」の複数三人称から「私」の単数一人称に入れ替わることで、個人のナチ体制への関与と無為の罪が次のように問われている。

「そう、これが当時の姿である。ブランデンブルク門へのSAの凱旋で、私も一緒に行進していた。そう、私は覚えている。ニュルンベルク党大会で私は「ハイル」と叫んで、そのあとゲシュタポが私の隣人を呼び寄せたときに、私は背を向け、自問した。私には関係のないことではないのかと。憶えているだろうか——一九三三年、一九三六年、一九三九年に私も賛成した。私は反対の行動を取ったのか？」

ラスト・シーンでは十字架を背負うドイツ人集団の姿が再現され、ドイツ人——「悪に歓声の声をあげ」、「憎悪と復讐の歌に酔いしれ」、「自由の言葉と自由の精神に死と滅亡を宣言し」、「罪なき人間と無防備の民族に襲いかかり、殺害するためにその手を貸した何百万のドイツ人」の「集団的罪」がふたたび問われて、この映画は幕を閉じる。

このような物語にそってアメリカの世論も動いた。八四％が強制収容所報道を「誇張」ではなく「本当」であると信じ、ドキュメンタリー映

画を全国の映画館で上映することに六割が支持した。「殺害と餓死」をドイツ人は「まったく是認」(三二%)、あるいは「部分的に是認」していた(五一%)と考え、ほぼ半数が「残虐行為」をドイツ人の「多くが知っていた」と推測している。②③ ほぼ四割が「多数が残虐で、野蛮」だともなしたドイツ人に対して、厳しい「罰」も求められた。四五年五月に「再建・復帰、再教育、通商の奨励、再出発」などの寛大な処置を求める市民の割合は四三年の一七%から八%に減少し、「取締り、武装解除、ナチ撲滅、重工業の管理」などの「監督と管理」の対応には四六%(四三年「四四%」)が、「小国家への分割、政治的統一体としての破壊、無力化」などを求める「非常に厳しい扱い」には三四%(二二%)が賛成した。④ 四五年一月に六割が対独占領政策を「生温い」と感じていたのである。⑤

3 ドイツ人の反応

さて、アメリカ世論が推測したように、ドイツ人は「残虐行為」をその「多くが知っていた」のだろうか？ まず確認しなければならないことは、ドイツ人にとって強制収容所の存在は周知の事実であったということである。その存在は『ミュンヘン写真誌』や『ベオプアハター写真誌』などでナチス自身によって紹介されている。そこは「労働と規律のために人間を教育する収容所。教育されたいつの日か、ドイツ・ナチズムの戦線に編入されることになる人間」を送り出すための人間形成と規律の場であったが、ドイツ一般住民においても、強制収容所は反体制派抑圧のための刑罰機関や規律の場として理解されていた。⑥ 四六年にアメリカ軍心理戦局のヤノヴィッツが行った意識調査で二八歳の主婦は、囚人は勤勉に働き、十分に食料を与えられて、ぶたれたり、「ハイル・ヒ

トラー」と声をそろえて叫ばされると想像していたと発言している。⑦ ユダヤ人の身分を隠してベルリンに生活していたI・ドイッチェクローンは回想録のなかで、「強制収容所」という言葉がその頃はまだ今日のような意味をもっておらず、「口に手を当てて」「オラニエンブルク」や「ダッハウ」の名が囁かれていた」と述べているが、噂そのものがドイツ住民の規律化の手段として機能していたといえよう。七〇人のドイツ市民を聞き取り調査したM・ヤノヴィッツによれば、強制収容所の存在を知らないものは「ほんのわずか」であるが、その存在に關してわずかな見聞しかもたず、「そこでの残虐行為を知っていたことを否定」するものが「四分の三」を占めている。⑧ 「強制収容所の正しい情報をもって」と認識していたのは「たった四人」であった。⑨

ユダヤ人やスラヴ民族の大量虐殺に關して、ドイツ人の大多数はその実態を正確に把握していたわけではないが、戦争後期になってその噂はかなり広がっていたようである。反ナチ抵抗運動の『白バラ通信』は「ポーランド占領以来この国において三〇万のユダヤ人が残忍きわまるやりかたで殺害されたという事実」⑩ に言及しているが、こういった噂の主な情報源は、東部戦線から一時休暇で帰省した兵士であった。たとえば、ツェレの機械工場で技師として働いていたK・デュルケフェールデンの日記には、そのような噂がいくつかつづらわれている。キールで橋の建設に従事して一時帰国した義兄からは、ユダヤ人の強制労働者が疲弊の後に次々と射殺され、皆殺のためにキールにはユダヤ人が存在しなくなったことを聞き、兵士としてヴィルナに駐留した会社の旧同僚からは、そこでユダヤ人が激滅し、「占領国のユダヤ人がポーランドに送られ、そこで一部は射殺され、一部はガス殺された」ことを彼は耳にした。⑪ このような噂をドイツ人の多くは外国のプロパガンダや、誇張されたものとして受け取っていたが、同時に「スラヴ民族とユダヤ人に犯した残虐

行為に対する罪の意識」も抱いていたようである。アメリカ軍の諜報部兵として従軍し、ドイツ人の心理状況を調査したS・パドローファーによれば、そのために多くのドイツ人は大量虐殺の報復におびえ、敗戦後に外国で重労働が強いられ、あるいはドイツの若者がシベリアに送られるのではないかと恐れていた^⑧。

このような心理状態のなかで、ドイツ人は連合軍から強制収容所の「現実」を突きつけられることになった。西部戦線でアウシュヴィッツの写真を載せたピラを見たヘルムート・Nは四五年三月に手紙で「こんなことが起こりうるはずなんてないんじゃないか。でもこれはほかのこととびつたり当てはまっています、すべてそろったイメージを生み出している。なぜ僕がそれを信じるのか、その訳を君に説明できない。疑って、そのイメージをぬぐい消すことができないのだよ」と困惑を妻に伝えた^⑨。広まっていった噂と徐々に明らかになっていった「現実」とがしだいに重なり合いながら、ドイツ人はその「現実」のイメージを作り上げていったのである。

その情報は占領以前に聴覚メディア、すなわちラジオによって伝えられた。禁止にもかかわらず、多くのドイツ人がBBC放送とラジオ・ルクセンブルクのドイツ語放送を聴いており、BBCは四二年一二月からガス殺を含む情報のキャンペーン展開している。ドイツチェクロンはすでに四二年一〇月にBBC放送によって「ガス室での殺害や銃殺」について耳にした^⑩が、信用することはできなかったという^⑪。

すでに空軍によって写真人のピラが撒かれていたが、占領後に連合軍は視覚メディアによって広報活動を展開することができるようになった。四月二三日に英米連合軍は、強制収容所の写真を載せたポスターを「住民が出かけ、帰宅するときに見ざるをえない箇所に置かれた大きな掲示板」に貼り付けることを決定した^⑫。写真6はその一枚である。「こ

の恥ずべき行為…お前たちの罪だ！」の見出しの下には、おもにダッハウ強制収容所で撮られた七枚の写真が掲載されている。そのメッセージは明快である。

「おまえたちは騒ぎ立てることなく傍観し、無言のうちに黙認した：／なぜおまえたちは抗議の声と怒りの叫びをあげてドイツ人の良心を呼び覚まさなかったのだ／これはおまえたちの大きな罪だ。この残酷な犯罪に連帯責任を負っている。」

「集団的罪」テーゼに基づくこのようなメッセージは、もう一つの視覚メディアである映画によっても伝えられた。『死の碾き臼』が四六年一月二五日から英米占領地区で公開され、一一四本がドイツの映画館に配給されたのである。その鑑賞率は、アメリカ軍将校によるベルリンでの四六年四月の調査では一六%であった^⑬。

聴覚メディアではまだ疑念をぬぐいきれなかったが、視覚メディアによってドイツ人の大半がこの報道を「事実」と認めた。ヤノヴィッツによる七〇人の聞き取り調査によれば、五〇人以上が「主要な点について信じ」、その程度などに保留をつけて信用したものは一五人で、「強い疑念」や「不信」を表明したものは「ほんの少数」であった^⑭。この見せつけられた「事実」にドイツ人はどのように反応したのだろうか。空襲の影響を調査するためにアメリカ政府から派遣されたJ・スターンは、強制収容所の写真の張られたポスターを見つめるドイツ住民の様子を次のように伝えている。

「私たちは住民が小集団になって木々、市の広報板、閉鎖した店の空のショーウィンドーの前に立っている姿を見た。この人びとは沈黙し、身動きせずにはばらく立ち尽くした。そのあと、首を横に振り、ゆつくりと離れていった。この木々、広報板、陳列窓には、そしてどの村やどの都市にも、通りの中心点で住民は大きなポスターを見ることができ、

そこには大きな黒文字で次の言葉がその住民にむかって叫んでいた。／＼誰の罪なのだ？／＼その群集から発せられた言葉を私は一言も聞かなかった。時々、女性が手で顔を覆い、あるいは、うめき声や驚愕の叫びを飲み込もうとしているかのように、ハンカチを口に当てた。また、年長の男たちは催眠術にかけられたようにばかりと口を開けて、数分間それを凝視した。しばらくしてこの人たちはゆっくりと、押し黙ったまま立ち去り、他の人たちがそこにやってきた。」^⑤

また、作家のE・ケストナーは『死の碾き臼』の上映後に示された観客の反応を次のように記している。

「大半は沈黙していた。押し黙って帰宅した。青ざめて出てきて、空を見上げ、「ごらん、雪が降っている」と言う人たちもいた。また、「プロパガンダだ！ アメリカのプロパガンダだ！ かつてプロパガンダで、またはプロパガンダだ！」とぶつぶつ言う人たちもいた。この人たちはそれで何を言おうとしていたのか？ プロパガンダの嘘なのどとはつきり口には出そうとはしていない。なんといても、撮影されたものをこの人たちは見ていたのだから。」^⑥

驚愕と沈黙——これが、「事実」を突きつけられたドイツ人の最初の反応だったようである。しかし、「誰の罪なのだ？」の問いかけにドイツ人は答えを準備しなければならなかった。この問いかけに多くのドイツ人は、まず「集団的罪」テーゼの前提を否定した。つまり、無知の強調である。

「私たちは何も知らなかった！ 私たちは何も知らなかった！——パーク—ホワイトはこの言葉を何度も、同じ調子で聞かされたために、この言葉がドイツ国歌のように思われたという。^⑦ ダッハウ住民の意識調査を行ったP・ラックリッジも、「そう、収容所の状態は恐ろしいものですが、それについて私たちは何も知らなかったということをおなた方

は理解しなければなりません」と、住民から説得されている。彼女はこのような人物と何度も出会うことになる。彼女が会話した「どのドイツ人も、ダッハウにおいてだけでなく、ブーヘンヴァルトやオーアドゥルフ、ベルゼンでも、収容所の知識やそれに対する責任を全部否定した」という。^⑧

知らなかったことには責任は取れない——これが当時のドイツ人の弁明であった。『死の碾き臼』上映後のベルリンにおける意識調査で九一%がこの映画を全住民に見せるべきであると答えたが、七〇%が「ドイツ民族全体がこの残虐行為に共同責任を負っているわけではない」と主張している。^⑨ ヤノヴィッツ調査でも、七〇人のうち「ドイツ人全体の罪」を認めたのは三人だけで、その罪はナチス幹部に転嫁された。^⑩ デニーはこのような責任転嫁の一例として、「ヒトラー少女隊」員としてナチ体制に「誓いを立てた支持者」であった少女を紹介している。戦後に強制収容所の見学を強いられ、その陰惨な状況にほとんど狂乱状態になった彼女は、「やつらはこの人たちになんて恐ろしいことをしたのでしょうか」とうめき声をあげたという。^⑪ 強制収容所のドイツ人収容者であったE・コーゴンは、連合軍の「ショック」政策がドイツ人の良心の力を呼び覚まさなかったと、その失敗を宣言した。「（その政策は）ナチスの恥ずべき行為に全員が共同責任を負っているという告発に対して拒否反応を呼び起こしたのである。まったくお粗末な結果だった。」^⑫

呼び覚まされたのは「良心の力」ではなく、「無関心」でもあったことがアメリカ人によって報告されている。前述したように、アメリカの強制収容所報道はその近隣住民が惨劇に無関心を装い、エゴイスティックに行動していることを指摘していたが、ダッハウを調査したラックリッジも、「普通の市民とダッハウの町はまったく無関心であった」と、収容者の痛ましい状況に個人も市民団体も少しの関心も示さず、自分の

国民にさえ援助が提供されなかったことを確認して、自己憐憫の涙を流していたことを伝えている。「平均的なドイツ人はここ一三年間に行なってきたどんなことにも積極的に遺憾に思っていない。この人たちはただ戦争に敗れたことを遺憾に思っている。この人たちが流した涙は偽善者の涙である」と。⁵³ドイツ人とユダヤ人の関係を観察したアメリカ人将校のM・モスコヴィッツは「ポジティブなものであれ、ネガティブなものであれ、ドイツ人がユダヤ人に対していかなる感情的な反応も欠如している」ことに衝撃を受けた。ナチズムの悪行を非難し、強制収容所の恐怖を語るにも、犠牲者に対する共感の言葉が聞かれることはなく、その声を聞くことはショッキングなことであったという。⁵⁴

驚愕、沈黙、無知の強調、「集団的罪」の否定、無関心——もちろんすべてのドイツ人がこの反応を示したわけではない。それは、「集団的罪」を負うとされたナチスの「民族共同体」に自己同一化していたドイツ人多数派を構成する加害者・加担者・同調者・傍観者の反応であった。ヤノヴィッツ報告で「ドイツ人全体の罪」を認めた三人は神学部教授と二人のマルクス主義者であったが、このようなドイツ住民の少数派を構成する抵抗者・犠牲者は異なる反応を示したのである。パドローファ―は「自己憐憫に浸らず、泣き言を漏らさず、自分が取るに足らないものであり、罪はないと言いつたことがなかったドイツ人」にその時点で二人しか出会えなかったが、その一人が三年のあいだ強制収容所を経験した社会民主主義者であった。彼はドイツ人民自身が徹底的な粛清を試みなければならず、犯罪に責任あるものは無慈悲に駆除され、若者は再教育されなければならないと主張したという。⁵⁵ラックリッジのダッハウ調査でもそのようなドイツ人が見出されている。⁵⁶フランス人の強制労働者を援助した廉で収容所に収監され、解放後に軍事政權から市長に任命された男性はドイツ人であることを恥辱に感じ、「ナチスが政權を取

り、このような犯罪を長続きさせたのは、あるドイツ人たちは積極的に賛成し、残りのドイツ人が犯罪的に言いなりだったからだ。いまや私たちはすべてを償わなければならない」とドイツ人全体の責任を糾弾した。また、夫が軍事命令に従わなかったために収容所に入れられ、そのためにハンブルクからダッハウへ移り住んだ女性は、強制収容所に対する「ドイツ人の罪」をラックリッジから問われ、次のように答えている。

「はい、これはすべて私たちが行なったことです。私たちの大半は起こっていたことを知りませんでした。私たちは何もしてませんでした。このことすべてがどんな結末になるのか、私はわかりません。私にとって確実な一つのこととは、私の息子が祖国のために犯罪的な畜生になることとはないということです。」

反対や抵抗、犠牲によって「民族共同体」に対して距離をとることができたこの少数派は解放者の物語を受け入れることができ、責任追及、償い、再教育、そして「祖国のために犯罪的な畜生」とならぬ未来の構築という「もう一つのドイツ」の物語を語ることができた。これに対して多数派はその「事実」に対して物語を構築できず、呆然と驚愕し、沈黙と拒否と無関心の殻になかに閉じこもらざるをえなかったのである。

4 「犠牲者物語」

しかしドイツ人多数派も、ホロコーストを含む戦争体験を語る物語を徐々に形成していった。次のモスコヴィッツの観察は、その物語と、それに基づいて西ドイツが「犠牲者共同体」として構成されていく過程を暗示している点で興味深い。

「六百万人のユダヤ人に対する罪の意識をドイツ人大衆が回避するもつとも共有されたメカニズムは、ドイツ人自身も、ことによってはどの

人びとよりも甚大なナチズムの犠牲者であると確信していることである。／＼ドイツ人は、他の抑圧された人々と同様に自分は非難されるのではなく、同情されるに値すると思えるにいたっている。自分も「脅していた」犯罪者が行った犯罪にやましさを感じるなど、どうしてできようか？ 自分たちはだまされ、裏切られたとドイツ人は口をそろえて釈明している。⁵⁵⁾

ドイツ人自身がナチズムの犠牲者であるとすれば、いったい誰がナチスだったのだろうか？ パドーファーは「私たちはもう二ヶ月もこの仕事に就いて多くの人たちと話し、たくさん質問して、一度も、一度たりともナチスを見つげなかった」と、ドイツ社会から「ナチス」が消えてしまったことに驚いた。「ドイツ人は全員が反ナチで、全員がナチスに反対していた」という。⁵⁶⁾ バークーホワイトは「ドイツ人は、ナチスが北極からやって来て、なんらの方法でドイツに侵入してきたエスキモアの異人種であるかのような顔をしている」と述べたアメリカ軍少佐の発言を紹介している。⁵⁷⁾ しかし、パドーファーが質問したドイツ人のなかにはナチスの組織に積極的に加わっていたものは少なくなかった。たとえば一九歳のある少女は、ナチ少女団の活動的なメンバーだったが、その組織も自分も「非政治的」だと言い張っている。⁵⁸⁾ 「総統の人生」の読み物を教材に使っていた国民学校の女教師は、その読み物を「非政治的な子供の物語」とみなし、自分も「非政治的」であることを強調している。⁵⁹⁾ 一九三三年からナチ党员であったある医師は入党の理由を「開業医としてやっていく上での障害を取り除く保証」であると述べ、同様に自分が「非政治的」であると主張した。⁶⁰⁾ 「商売上の手段」として三三年に入党し、ユダヤ人財産の剥奪で利益をあげたある不動産ブローカーは、自分自身を反ユダヤ主義者ではなく、「いい人たちだったからとても好かれていた」ユダヤ人から富を得ただけだったという。⁶¹⁾ アメリカ諜報部員のLt・

D・レーナーは四五年四月の報告のなかでこの「ムス・ナチ」の論理と弁明にあきれた。

「ナチスで「なければならぬ(Muss)」だったということだ。いまや占領ドイツのいたるところでふたたび口を開いた「なければならぬ」があった、あるいは「強制され」たこのナチス全員を粘り強く尋問して彼らが明らかにしたことは、経済的地位を改善し、その地位を保持し、あるいはかわりをもつためにはナチスで「なければならぬ」だったということである。ある者たちは、地方の党役員が入党を促したから、ナチスになら「なければならぬ」なかった。拒否して、その結果を引き受けるといふ考えにはほとんど誰も行き着かなかった。⁶²⁾

すなわち、「ナチス」とはその世界観を共有する政治的な集団であつて、社会・経済的な理由で入党し、あるいはその組織にかかわつたものは「非政治的」であるがゆえに、「ナチス」ではなかつたのである。この「ナチス」、あるいはその一部だけがホロコーストの責任者であつた。デニーによれば、強制収容所での惨劇の責任をヒトラーに転嫁した人びとが「でもあなたは行進し、ナチスに敬礼し、「ハイル・ヒトラー」と叫んだらう」と詰問されると、そのなかの若い女性には「でもそうしなければならなかった」と応答した。「もし私たちがそうしなかつたら、ゲシュタポは私たちを逮捕し、強制収容所に送り込んだでしょう。」⁶³⁾

ふたたび「ムス・ナチ」の論理と弁明が展開されたが、ここではナチズムとの関係を弁明するだけでなく、自分を犠牲者として認識するためであつた。パドーファーが調査したある高級官僚も、強制収容所の犯罪に対する道徳的な責任を問われ、「私は危険なことにかかわることを望んでいなかった。もし私が政府を批判するようなことをあえてしたならば、強制収容所にくたばっていたでしょう」と答えている。⁶⁴⁾ 彼は個人が犠牲者になる可能性を語っていたが、ヤノヴィッツ報告ではドイツ人全

体が強制収容所の犠牲者であることを示唆する発言が紹介されている。「あなた方アメリカ人は、私たちがどのような状況のなかで生きていたのかを理解することはほとんどできない。ドイツのすべてが強制収容所であるかのようにだったのだ。」⁷⁶

この見解に違和感を覚え、自分を強制収容所の犠牲者とみなさないドイツ人も、自らの戦争被害、とくに連合軍による空襲被害が強制収容所の惨劇に匹敵するものであることを感じていた。バークーホワイトは、強制収容所の写真公開にドイツ人が「無辜の女・子供が爆撃されたというのに、こんな人心を乱すことをやっつてどういふつもりなのだ」と反応していることを伝えている⁷⁷。コーゴンによれば、空襲で妻や子供の黒焦げになった姿を見ていたドイツ人は強制収容所の写真に心を揺さぶられることはできなかった。その写真の犠牲者に対してドイツ人は焼死した親や子供ほど同情心をもつことなく、それぞれどこか多くの人びとがその写真をドイツ人の空襲被害のものだとみなしていたのだという⁷⁸。実際に、ブーヘンヴァルトは空襲犠牲者の埋葬のために使われていたという噂が広がっていた⁷⁹。

そして、強制収容所での犯罪がドイツ人の名誉を傷つけたという理由でも、ドイツ人はみずからをその責任者の犠牲者とみなした。先ほどの高級官僚はドイツ人による「残虐行為」を遺憾に思ったが、それは「そのことでドイツは悪名を着せられたから」であった。看護奉仕のために強制収容所の惨劇を目の当たりにしたE・ヴァルターは、それが国民的矜持の問題であることを五月四日の日記に簡潔に記している。「私はこの瞬間、ドイツ人であることをいかに恥じたことか！ 私たちは何とゆうことをしでかしたのか！ そして母は、ドイツ人がそんなことをするなんて信じていなかった。」⁸⁰

その悲惨な光景はドイツ人にとってトラウマになったようである。バ

イエレンでの『死の碾き臼』鑑賞者調査で、七割の者がこの映画に将来も「付けまわされる」だろうと答えている⁸¹。ナチ党大会の記録映画を監督したL・リーフェンシュタールはそのようなトラウマ経験を回想している。アメリカ当局から尋問を受けた彼女は強制収容所の写真を見せられて衝撃を受け、部屋に連れ戻された。そのとき「陰惨な映像が私を激しく苦しめ、私はベッドでのたうちまわり、まんじりともできなかった」という⁸²。彼女はこうして強制収容所の犠牲者であると感ずることができたのである。

5 「犠牲者共同体」への道

一九四五年一月二〇日に始まり、翌年一月一日に二人の死刑、三人の終身刑、四人の懲役刑、二人の無罪の判決で終了したニュルンベルク裁判はドイツ人に「犠牲者物語」を確認する機会を与えた。

世論調査を見るかぎり、ドイツ人の大半は裁判とその判決を受け入れたようである。裁判の開始から終了までドイツ人の約八割がその裁判を公正と判断し、その判決を五五%が正当、二一%が「寛大すぎる」とみなしていた。判決を聞いたときの感情を問われ、半数以上が肯定的な感情を抱き（満足 \parallel 二六%／正義が行われた \parallel 二三%／歓喜 \parallel 三%）、否定的な感情の一二%（憤慨、反抗心 \parallel 七%／怒り \parallel 三%／悲嘆、悲しみ \parallel 二%）を圧倒した。ほぼ七割がニュルンベルク裁判報道を信頼し、ほぼ八割が裁判で提出された証拠から新しいことを学んだが、その大半は強制収容所（八四%）とユダヤ人殺害（二三%——四五年十二月調査）についてであった⁸³。

四六—四七年にアメリカ軍事政権によってニュルンベルク裁判のドキュメンタリー映画『ニュルンベルクとその教訓』が製作されたが、この

映画は比較的観客を集めて、五〇年代まで上映されている。強制収容所の映像も含む記録映像を使用しながら、証人と被告人の発言を中心にまとめられたこの映画は、被告人が自らの罪を認め、改悔し、あるいは総統に責任を転嫁して行く姿を有罪判決まで追っていたが、ドイツ人からこの「物語」は承認されたといえよう。その点で、あからさまに「集団的な罪」を告発し、ドイツ人には受け入れがたい「物語」を提示したがゆえに、当時もつとも不評であり、短期間で打ち切られた映画『死の碾き臼』に対する反応とは対照的である。^⑧

外部者の見たドイツ人の裁判観は少々異なっていた。ニュルンベルク市民の裁判観を調査した『ニューズウィーク』のベルリン支局長のJ・オドンネルは、「おそらくニュルンベルクほど、世界のこの規模の都市のなかでこの裁判が市井の人びとから議論されていない所はないだろうし、ドイツほどこの裁判が知られていない国はないであろう」と、ドイツ人の無関心さにあきれた。^⑨ たしかに誇張されてはいるが、ドイツ人の裁判に対する当事者意識が外部の観察者の期待を大きく裏切るものであったことが、ここには表現されている。ナチスによってアメリカに亡命を余儀なくされ、アメリカ検事当局のスタッフとして帰国したR・M・ケムプナーも「裁判がまったく効果をもたず、敗戦以来、自分の殻に閉じこもり、公的活動のどんな展開も無視した」ドイツ人が異常に多いと嘆き、同じく帰国したジャーナリストのF・E・ヒルシュは、この裁判がドイツ人の再教育を第一の目的としていたのならば、その試みは成功しなかったことを確認した。

「心から民主的な人びとでさえ裁判にさほど関心がない。人びとはわずかの食料と燃料を集め、仕事のようなものを探そうと忙しかったために一〇カ月の間も法的な裁判に集中することができなかった。あるいはこの人たちは、…自分自身はどんな形でもナチ党といままで関わってこなか

ったし、その専制政治でしばしば苦しめられたのだから、いつも憎んでいた者たちの犯罪が自分たちとまったく関係がないと感じていた。」^⑩

強制収容所の映画が法廷で上映されたときの様子を『フランクフルト・ルトンシャウ』紙で伝えたP・コールヘーファーは、その惨状がドイツ人によって引き起こされたことに激しい恥辱感を覚えたが、その感情を克服する論理をさまざま見出している。つまり、そのような犯罪を行なった被告人たちは「本当にドイツ人だったのか」と問い、「いや、違う、それはナチの獣であり、地獄の番犬であり、どんな人間的な感情ももたない悪魔のような人物なのだ。しかしこの人たちはドイツ人の名を永遠に汚し、この醜悪なる汚点はもはや何によっても消し去られない」と彼らを「非国民」に仕立て上げたのである。^⑪ また、オドンネルによれば、ニュルンベルクの歴史的建造物の破壊を「二〇世紀が一七世紀に行った犯罪」と呼んだ二七歳の旧国防軍兵士は「多くの国での貧困と破壊」を思い起こし、敗北した祖国を見て、「これらの被告人たちに五プフェニツヒほどの誠実、あるいは品位があったのなら、彼らは世界の前に立って有罪！ 有罪！ 有罪！と大声で叫んでいただいでしょうね」とつぶやいたという。^⑫ このように、ドイツ人は自分に関わりがないかぎりで裁判とその判決を受け入れ、被告人たちをドイツ人の名に消し去れない「汚点」を残し、ドイツの歴史を破壊した「非国民」とみなし、自分をその「犠牲者」と認識したのである。「非国民」たちだけを葬り、その「犠牲者」の責任を問わないことが、この裁判と判決を受け入れる条件だったといえよう。^⑬

それゆえに、裁判の被告以外の「戦争犯罪人」に関する問いかけに、ドイツ人はあいまいな態度をとらざるを得なかった。四六年二月の調査で、七割のドイツ市民がニュルンベルク裁判の被告以外にまだ戦争犯罪人が存在することを認め、その被告だけが「唯一の有罪者である」と答

えた市民の割合（二七％）を大きく上回った。しかしこの七割の市民のうち、その「戦争犯罪人」として二三％が「指導者、地区のボス、政治家」をあげているが、四割は「無回答」であった。またその七割の市民うちの約六割がこの「戦争犯罪人」を裁判にかけべきだと考えているが、この問題にも四分の一が回答を保留している。判決後の四六年一月になると、ドイツ市民は「ほかの戦争犯罪人」に寛容になっていた。「もつと下級の指導者が裁判にかけられるべき」と「この刑罰で十分」と考える市民の割合はまったく同数（四三％）になったのである。この傾向はニュルンベルク裁判以降も続き、表1が示しているように、建國期になると裁判や被告人に対する評価はまったく逆転してしまった。ここには占領期の経験が大きくかわっているように思われる。

五〇年の調査でロシア（九五％）だけでなく、アメリカ（四九％）の占領政策に「不快」を感じているように、ドイツ人は占領政策にかなり批判的であった。⑧「戦争犯罪裁判」はニュルンベルク裁判で終わったわけではなく、ニュルンベルク継続裁判やダッハウ裁判など、その後も継続して裁判が開かれており、多くの死刑判決が下されている。もちろんその対象になったのはドイツ人のわずかな部分ではあるが、（准）公職からの追放などの措置を含む非ナチ化政策においては、四八年一月の調査で一六％の市民がその「被害」を受けたと答えている。四八年と五三年の調査で、非ナチ化政策の目的が達成されたと判断したドイツ人は二割も満たず、まったく否定的な見解、すなわち「非ナチ化は必要なく、その実施は誤っていた」（三一％と二六％）と「非ナチ化は占領軍の嫌がらせにすぎなかった」（九％と一四％）に四割の市民が首肯した。⑨五一年の調査で「占領国が一九四五年以来ドイツで行ったもつとも大きな過ち」として八％が「戦争犯罪裁判」、六％が「非ナチ化」をあげているが、一％が「ドイツ人への中傷と不当な非難」を最大の過ちとみなしている

表1	ニュルンベルク裁判は、		ニュルンベルク裁判の判決は、		
	公正	不公正	正当	厳しすぎる	寛大すぎる
46年10月	78%	6%	55%	9%	21%
50年10月	38%	30%	30%	40%	6%
まだ収監されている将軍はどんな罪も犯していない／有罪である（52年8月）			63％／9%		
「無罪」なのに投獄されている理由			63％のうち		
・ドイツに対する憎悪と復讐の感情をぶちまけるために			11%		
・連合軍が将軍の影響力と「鋭い軍事的心性と質」を怖れているから			11%		
・ドイツが敗北したから			10%		
・将軍たちは命令を遂行し、その義務を果たしたから			8%		
・連合軍はスケープゴートを必要としているから			6%		

るように⁸⁷、このような占領政策は、少なくとも自らを「犠牲者」とみなしていたドイツ人から不当なものと感じられていた。この「ドイツ人への中傷と不当な非難」とはいうまでもなく「集団的罪」テーゼであるが、少なくともニュルンベルク裁判の時点でこのテーゼはもはや連合国の占領政策の指針から消えていた。この裁判のジャクソン主席検察官は「私たちは全ドイツ民族をとがめる意図はない」と明言していたし、その判決も一括ではなく、個々の犯罪構成要件に基づいて個別に下されている。それにもかかわらずドイツ人はこのテーゼの不当性を訴え続けていた。歴史家のW・ベントとN・フライは、このテーゼが占領政策の不当性を根拠づけ、それを拒否する口実をつくり、自らの苦悩を強調するためにドイツ人によって「発明」されたと論じている⁸⁸が、正鵠を射た議論であるといえよう。つまり、裁判と被告人に対する立場の大きな転換は、占領政策による「犯罪人」の拡大をできるだけ食い止め、このような過去の追求に「終止符(Schlussstrich)」を打とうとする願望の現われとみなすことができる。

一九四九年九月二〇日に行われた所信表明演説⁸⁹でアデナウアー首相は、「ナチス時代と戦時中に行われた犯罪に本当に責任・罪のある者」と「政治的に非の打ちどころのない者」と「そうではない者」とに西ドイツ国民を区分する三分法を克服しようとした。「本当に責任・罪のある者」は厳罰に処されるべきだが、新たに形成された西ドイツ国民共同体において、それ以外の区分は即座に消え去らなければならなかった。アデナウアー政権が最初に行った政策はナチス期と占領期に犯された罪に対する「恩赦」であったが、「過ぎ去ったことを過ぎ去らせることを正しいと認める」態度をアデナウアーは取り、戦争と戦後の混乱がもたらした「非常に厳しい試練と誘惑」のために犯された多くの過失や違反行為に理解を示した。彼は「本当に責任・罪のある者」を「非国民」と

して排除することで、「政治的に非の打ちどころのない者」と「そうではない者」から構成された新たな西ドイツ国民共同体を築こうとしたのである。それは、ナチズムとそれが引き起こした戦争、敗北、そして占領政策による犠牲者の共同体であった。この「犠牲者共同体」はアデナウアーの独創に基づいていたのではなく、強制収容所の解放以来、ドイツ人の多数によって形成された「犠牲者物語」の上に成り立っていたのであった。

6 結語

米軍従軍ラビのアイヒホルンはグッハウでの礼拝式で三つの物語を語ったが、解放者の「普遍主義」的な物語がホロコーストの表象を深く刻印することになった。

強制収容所の現実には十数年にわたる歴史の変遷のなかでけっして一様であったわけではなく、また強制収容所によって、あるいはその犠牲者の国籍や民族範疇によってもその現実は大大きく異なっていた。そして強制収容所だけが大量虐殺の現場ではなかった。しかし、英米軍が解放し、その時点で撮られ、語られた強制収容所の現実がホロコーストの「現実」となったのである。ナチスはホロコーストの痕跡をできうるかぎり消却しようとしたが、英米軍によって発見されたその「現実」は、ナチスが消しきれなかった痕跡のいわば「残滓」であった。東欧圏の強制収容所からナチスは「残滓」をほとんど消却して撤退することができたが、連合軍の進軍のスピードが増すにつれて、「残滓」の量は増し、アメリカ軍はオーアドルフの解放以来、大量の「残滓」を発見することができたのである。マイダネクやアウシュヴィッツの解放が報道の価値を見出されなかったのは、その「残滓」の姿が驚愕を与えるに十分ではなかった

からでもあった。ブーヘンヴァルトは撤収命令が下された五日後に解放され、大量の「残滓」を残したが、それは強制収容所の「現実」そのものというよりも、その最後の姿だった。つまり、四五年一月にアウシュヴィッツやほかの強制収容所が撤収されていくなかで、収容者の一部は西の強制収容所への「死の行進」を強いられ、途上で大量の犠牲者を出すなか、生存者も劣悪な状況の下で次々と死亡していった。ブーヘンヴァルトでは三月まで死体の焼却作業が行われたが、燃料不足のために大量墓地に埋められることになり、埋め切れなかった死体がバラックや貨車に放置された^⑤——これが、解放者がその物語を形成する題材となった「現実」だったのである。この物語では、ゲットーで衰弱死や餓死を余儀なくされ、ガス殺や野外射殺で命を奪われたユダヤ人や、「うなじ撃ち」で射殺された赤軍捕虜、数十万人の犠牲者を出したシンティ・ロマ、「安楽死」の名の下に殺害された知的障害者などの生と死の「現実」が語られることはなかった。

時期によって異なるが、英米軍が解放したドイツ国内の強制収容所でユダヤ人収容者はむしろ少数派であった。ブーヘンヴァルトでは四二年にユダヤ人収容者率は一一％にすぎず、解放された時点でも、生存者のなかでユダヤ系の占める割合は二割程度であった^⑥。大半のユダヤ人犠牲者は、ナチスが「残滓」を残さず、そのために報道価値を見出さなかった絶滅収容所に送られ、殺害されたのである。西側の報道や『死の碾き臼』でユダヤ人が多くの犠牲者集団の一集団としてしか言及されなかった理由の一つがここにある。そして「ホロコースト」は一九八〇年代以降に市民権を得た概念であって、当時この出来事に固有名詞は与えられず、それはたいてい「残虐行為」という一般概念、あるいは「絶滅」というナチ用語で呼ばれていた。このことはホロコーストが「戦争犯罪」というカテゴリーのなかで理解されていたことにもかかわっている。ニ

ユルンベルク裁判では犯罪構成要件として「戦争犯罪」、「平和に対する罪」、「人道に対する罪」の三つが上げられたが、裁判は「戦争犯罪」に集中し、ホロコーストはその犯罪のカテゴリーのなかで捉えられた。解放者の物語のなかでホロコーストは、ナチス・ドイツの残虐性を示す象徴的な出来事ではあったが、その犠牲者がユダヤ人に特化されない多くの戦争被害の一つであり、その世界的意義はまだ見出されていなかった^⑦のである。冷戦を戦い始めたアメリカにおいて、世界的意義を見出されたのはむしろ「ヒロシマ」であった。アメリカにとってホロコーストは、いまや同盟を結ぶことになるドイツ国家に対して、新たな敵となつたソ連とともに戦つた過去の戦争の出来事となり、反共的な全体主義論のなかで語られたにすぎなかったが、「ヒロシマ」は核戦争の未来を予示する歴史的事件になつたのである^⑧。その意味でホロコーストはまだ「ホロコースト」にはなっていないといえよう。固有名詞を与えられ、今日のような世界的な意義を獲得する紆余曲折の道のりをホロコーストはまだ歩み始めたばかりだった。

〈解放者、告発者、刑罰者としてのアメリカ人〉、〈加害者、罪人、被告人としてのドイツ人〉、〈その受動的な犠牲者〉の關係のなかで展開されていく物語によって語られたホロコーストにおいて、その犠牲者はナチ犯罪糾弾のための匿名の被写体となつた。勝者が撮る主体であり、敗者のドイツ人が撮られる客体となつたとすれば、犠牲者は敗者の犯罪を糾弾するための匿名の被写体であり、敗者の残虐性を世界に示すための「展示品」となつた^⑨。実際に、ブーヘンヴァルトを目撃したあるアメリカ軍将校は「残つた四人は展示品として陳列されている」と嘆いた。「ぼろきれにおいて、肉体の奇形などで。…このことは、この人びとの災難の正当化できない悪用 (Prostitution) である」ように彼には感じられたのである^⑩。またパッサウのP・ゼーヴァルトは、告発されるべき下

イツ人の罪をその存在に刻みつけられた犠牲者の嘆きを聞き取っている。「人類にこの残酷性と苦悩を見せつけるために、私たちは収容所からやってきたのだ。今や世間の目には、私たちは穢れ (Makel) に取りつかれているように見えている。」⁸⁵

アイヒホルンの二つ目の物語である犠牲者の「普遍主義」的な英雄物語が語られる余地は、このような解放者の物語のなかには残されていない。犠牲者たちは哀れむべき存在であっても、アイヒホルンのいう「独裁」と「暴君」に対して戦い、勝利した「勇者のなかの勇者」ではありえなかったのである。そして、解放者の物語ではホロコーストは解放によって終結したが、解放された者にとってその悲劇はまだ終わっていない。生存者の多くが解放後に衰弱死し、終戦時における旧ドイツ帝国に生存した約五万人のユダヤ人は、数週間で約三万人に減少したのである。生き残った人びとの多くも難民 (DP) として収容所などでの生活を余儀なくされ、しかもトラウマと情緒不安定の症状に悩まされ続けた。難民ユダヤ人の収容所を調査した K・S・ピンソンはその精神状態を次のように報告している。

「難民は落ち着きもない。難民ユダヤ人の中心で得られる印象は、つねに動いているというものである。すべての動きが目的にそった動きというわけではない。その動きの非常に多くが、この人びとが入り込んだ状況から生じた感情的な動きである。解放された年の大部分の期間に難民ユダヤ人が落ち着かず、歩き回っていた理由の多くは、ほとんど常軌を逸していた家族と友人の搜索であった。／難民ユダヤ人はまた、努力と集中を維持する能力の欠如を示している。この人びとは数時間働いた後、あるいは知的に集中した後に、疲れてしまう。」⁸⁶

このような状況のなかでは、生存ユダヤ人がホロコーストの過去から「普遍主義」的な英雄物語をみずから見出すこともほとんど不可能であ

った。ホロコーストの体験が残したのはアイヒホルンの第三の物語、つまりディアスポラの過去を否定し、パレスチナの未来に希望を見出す「特殊主義」的なシオニズムの物語であった。ピンソンによれば、シオニズムは難民収容所におけるユダヤ人生活の「支配的な哲学」になり、唯一の救済であると認められ、パレスチナとシオニズムの外部で思考することは感情や心理においてだけでなく、現実の物理的な意味においても危険であるとみなされたという。そして収容所に入り込んだシオニストたちは、パレスチナのユダヤ人旅団の「民族と共に生活し、民族のために働いた」英雄物語も持ち込んだ。「シオニストたちはこの破局のうちに意味があるように思われた綱領をもつ唯一の人びとであった」という。⁸⁷ 結局、ホロコーストは否定的な意味しかもてない経験だった。

ホロコーストから「普遍主義」的な英雄物語を作り上げ、建国神話に仕立て上げていったのは建国後の東ドイツであった。これに対して西ドイツでは、アイヒホルンが示した三つの物語とは異なる「犠牲者物語」を形成していったが、やがてそれは、ナチズムと共産主義を同一視する全体主義論的な「普遍主義」的な物語と結合し、西ドイツはナチズムと共産主義の犠牲者から構成された共同体となっていく。この「犠牲者共同体」においてホロコーストは、「犠牲者」としての西ドイツ国民の外部に位置づけられた「非国民」たちの過去であった。かつての「民族共同体」で加害者・加担者・同調者・傍観者であったドイツ人多数派からなるこの国民共同体は、ホロコーストに積極的な意味を与えないまま、復興を遂げていくことになる。反対や抵抗、犠牲によって「民族共同体」に対して距離をとることができた少数派が「もう一つのドイツ」の物語のなかでホロコーストを「ネガティブな建国神話」として形成するまで、一〇年以上の歳月が必要であった。

註

- ① Vgl., Barbie Zelizer, Remembering to forget. Holocaust Memory through the Camera's Eye, University of Chicago 1998, P. 49-85.
- ② Harold Marcuse, Legacies of Dachau. The Uses and Abuses of a Concentration Camp, 1933-2001, Cambridge University Press 2001, S. 52-55. Norbert Frei, >Wir waren blind, ungläubig und langsam.<. Buchenwald, Dachau und die amerikanischen Medien 1945, in: Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte 35 (1987). 西國連合軍による強制収容所の解放について Robert H. Abzug, Inside the Vicious Heart. Americans and the Liberation of Nazi Concentration Camps, New York, Oxford 1985.
- ③ Eli A Bohnnen, Als sich das Blatt gewendet hatte. Erinnerung eines amerikanischen Militär-Rabbiners an die Befreiung Dachaus, in: Dachauer Heft, H. 1, S.204f.
- ④ Percy Knauth, Buchenwald, in: Time, April 30, 1945, P. 40-43.
- ⑤ Harold Denny, The World Must Not Forget, in: New York Times Magazine, May 6, 1945, P. 8.
- ⑥ David Max Eichhorn, Sabbath-Gottesdienst im Lager Dachau. Bericht des US-Militärrabbiners über die erste Maiwoche 1945, in: Dachauer Heft, H. 1, S.206.
- ⑦ Eli A Bohnnen, Als sich das Blatt gewendet hatte. S. 205.
- ⑧ Margaret Bourke-White, Deutschland, April 1945, S. 91.
- ⑨ David Max Eichhorn, S Sabbath-Gottesdienst im Lager Dachau. 216-218.
- ⑩ 社説総覧。
- ⑪ Public Opinion Quarterly, June 1941, S. 326.
- ⑫ Public Opinion Quarterly, Winter 1941, S. 674.
- ⑬ Public Opinion Quarterly, Spring 1943, S. 173.
- ⑭ U.S.Editors back, urge harsh peace. The New York Times, 9. 5. 1945.
- ⑮ 解放報道について Hermann Weiß, Dachau und die

internationale Öffentlichkeit. Reaktionen auf die Befreiung des Lagers, in: Dachauer Heft, H. 1.

- ⑯ Cornelia Brink, Ikonen der Vernichtung. Öffentlicher Gebrauch von Fotografien aus nationalsozialistischen Konzentrationslagern nach 1945, Berlin 1998, S. 64. Vgl., Barbie Zelizer, S. 112.
- ⑰ Life, Vol. 18. No. 19 (May 7, 1945), P. 36.
- ⑱ 図説The New York Times, 1945年4月26日付の第1版のレイアウト例について Times, 1945年4月26日付の第1版のレイアウト例について Times, 1945年4月26日付の第1版のレイアウト例について。
- ⑲ Cornelia Brink, S.64. Vgl., Barbie Zelizer, S. 101.
- ⑳ Harold Denny, The World Must Not Forget, P. 42.
- ㉑ Life, Vol. 18. No. 19 (May 7, 1945), P. 32.
- ㉒ Dachau Captured by Americans Who Kill Guards, Liberate 32,000, in: New York Times, May 1, 1945.
- ㉓ Harold Denny, The World Must Not Forget, P. 8.
- ㉔ U.S.Editors back, urge harsh peace. The New York Times, 9. 5. 1945.
- ㉕ Cornelia Brink, Ikonen der Vernichtung, S.62. Vgl., Barbie Zelizer, S. 109—110.
- ㉖ 社説総覧。Michael Hoenisch u. a. (Hg.), USA und Deutschland. Amerikanische Kulturpolitik 1942-1949, Berlin 1980. 社説総覧 David Culbert, American film policy in the reeducation of Germany, in: Nicholas Pronay and Keith Wilson, The Political Reeducation of Germany & Her Allies after World War II. London & Sydney 1985. 社説総覧。
- ㉗ Brewster S. Chamberlin, Todesmühlen. Ein früher Versuch zur Massen-“Umerziehung” im besetzten Deutschland 1945-1946, in: Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte, 3. 1987, S. 422.
- ㉘ Public Opinion Quarterly, Summer 1945, S. 246, Public Opinion Quarterly, Fall 1945, S. 533.
- ㉙ Public Opinion Quarterly, Fall 1945, S. 533, Public Opinion

- Quarterly, Summer 1945, S. 247.
- ⑮ Vgl., Dettlef Hoffmann, Fotografierte Lager. Überlegungen zu einer Fotogeschichte deutscher Konzentrationslager. in: Fotogeschichte. Beiträge zur Geschichte und Ästhetik der Fotografie, Heft 59/1994, S. 3-20. Sybil Milton, Argument oder Illustration. Die Bedeutung von Fotodokumenten als Quelle. in: Fotogeschichte, Heft 28, 1988.
- ⑯ Morris Janowitz, German Reactions to Nazi Atrocities, in: American Journal of Sociology 2 (1946), P. 142.
- ⑰ イング・フォットナムローン、馬場謙一訳『黄金の星を背負った：ナチ支配下を生きたユダヤ人女性の証言』岩波書店、1991年、21頁。
- ⑱ Morris Janowitz, P. 142.
- ⑲ ハの問題に關しては、Hans Mommsen, Was haben die Deutschen vom Völkermord an den Juden gewußt? in: Walter H. Pehle, (Hg.), Der Judenpogrom 1938. Von der >Reichskristallnacht< zum Völkermord, Frankfurt am Main 1988. Volker Ulrich Wir haben nichts gewusst // Ein deutsches Trauma, in: 1999: Zeitschrift für Sozialgeschichte des 20. und 21. Jahrhunderts. 4/91. David Bankier, Die öffentliche Meinung im Hitler-Staat. Die "Endlösung" und die Deutschen. Eine Berichtigung, Berlin 1995, S.139-158.
- ⑳ イング・シヨル、内垣啓一訳『白バラは散らば』未來社、1994年、194頁。
- ㉑ Herbert Obenaus, Haben sie wirklich nichts gewußt? Ein Tagebuch zum Alltag von 1933-45 gibt eine deutliche Antwort, in: Journal für Geschichte 2 (1980) Heft 1, S.29.
- ㉒ Saul K. Padover, Experiment in Germany. The Story an American Intelligence Officer, New York, 1946, P. 18.
- ㉓ Gerhard Hirschfeld und Irima Renz, (Hg.), >Vormittags die ersten Amerikaner< Stimmen und Bilder vom Kriegsende 1945, Stuttgart 2005, S. 92.
- ㉔ イング・フォットナムローン、1998頁。
- ㉕ Charles E. Egan, All Reich to see Camp Atrocities, in: New York Times, April 24, 1945.
- ㉖ Cornelia Brink, Ikonen der Vernichtung, S.73.
- ㉗ Brewster S. Chamberlin, S. 435.
- ㉘ Morris Janowitz, P. 143.
- ㉙ James Stern, Die unsichtbaren Trümmer. Eine Reise im besetzten Deutschland 1945, Frankfurt am Main 2004, S. 49f.
- ㉚ Dagmar Barnouw, Ansichten von Deutschland (1945). Krieg und Gewalt in zeitgenössischen Photographie, Basel, Frankfurt am Main 1997, S. 55-65頁。
- ㉛ Margaret Bourke-White, S. 90.
- ㉜ Patricia Lochridge, Are Germans Human?. in: Woman's home companion, July 1945, S. 96.
- ㉝ Brewster S. Chamberlin, S.435.
- ㉞ Morris Janowitz, P. 143-4.
- ㉟ Harold Denny, The World Must Not Forget, P. 43.
- ㊱ Eugen Kogon, Gericht und Gewissen, in: Frankfurter Hefte, Jg. 1, Heft 1 1946, S. 28.
- ㊲ Patricia Lochridge, P. 96.
- ㊳ Moses Moskowitz, The Germans and the Jews: Postwar Report. Commentary 2 (July 1946), S. 11.
- ㊴ Saul K. Padover, P. 63-4.
- ㊵ Patricia Lochridge, P. 4, 96.
- ㊶ Moses Moskowitz, S. 10.
- ㊷ Saul K. Padover, P. 62.
- ㊸ Margaret Bourke-White, S. 27.
- ㊹ Saul K. Padover, P. 41.
- ㊺ Ibid., P. 92.
- ㊻ Ibid., P. 97-8.
- ㊼ Ibid., P. 56-58.
- ㊽ Ulrich Borsdorf, Lutz Niethammer, (Hg.), Zwischen Befreiung und Besatzung. Analysen des US- Geheimdienstes über Positionen und

- Strukturen deutscher Politik 1945, Wuppertal, 1976, S. 38.
- ⑮ Harold Denny, *The World Must Not Forget*, P. 42.
- ⑯ Saul K. Padover, P. 160.
- ⑰ Moris Janowitz, P. 144.
- ⑱ Margaret Bourke-White, S. 146.
- ⑳ Eugen Kogon, S. 29.
- ㉑ Moris Janowitz, P. 143.
- ㉒ Gerhard Hirschfeld und Irina Renz, (Hg.), S. 179.
- ㉓ Brewster S. Chamberlin, S. 434.
- ㉔ ハリ・ノートマン・トーマス『戦後ドイツ論』(上)『文芸春秋』1950年11月号、42-43頁。
- ㉕ Hadley Cantril (Hg.), *Public Opinion 1935-46*, Westport/CN 1951, Neudruck 1978, P. 1035-1039.
- ㉖ Helmut Regel, *Der Film als Instrument alliierter Besatzungspolitik in Westdeutschland*, in: Klaus Jaeger, Helmut Regel (Hg.), *Deutschland in Trümmern. Filmdokumente der Jahre 1945—1949*, Oberhausen 1976.
- ㉗ James O'Donnell, *German on der Strasse: What War Guilt Trials*, in: *Newsweek*, December 10, 1945, P.52.
- ㉘ Robert M. Kempner, *Impact of Nuremberg on the German Mind*, in: *The New York Times Magazine*, October 6, 1946, P. 66.
- ㉙ Felix Hirsch, *Lessons of Nuremberg*, in: *Current History* Oct. 1946, P. 313.
- ㉚ Paul Kohlhöfer, *Die Angeklagten vor dem KZ-Film*, *Frankfurter Rundschau* vom 4.12.1945.
- ㉛ James O'Donnell, P. 52.
- ㉜ Vgl., Anneke de Rudder > Warum das ganze Theater < Der Nürnberger Prozeß in den Augen der Zeitgenossen. in: *Jahrbuch für Antisemitismusforschung* 6 (1997). Peter Steinbach *Nationalsozialistische Gewaltverbrechen in der deutschen Öffentlichkeit nach 1945*, in: J. Weber/P. Steinbach (Hrsg.) : *Vergangenheitsbewältigung durch Strafverfahren?*
- NS-Prozesse in der Bundesrepublik Deutschland, München 1984, S. 13-39.
- ② Hadley Cantril (Hg.), *Public Opinion*, P.1037.
- ③ Ibid., P. 1040.
- ④ Richard L. Merritt, *Digesting the past: views of National Socialism in semi-sovereign Germany*, in: *SOCIETAS — A Review of Social History*, VII, NO. 2 (Spring 1977), P. 105, 107.
- ⑤ Elisabeth Noelle, Erich Peter Neumann, (Hg.), *Jahrbuch der Öffentlichen Meinung*, 1947-1955, Allensbach am Bodensee, 1956, S.146.
- ⑥ Ibid., S. 142.
- ⑦ Ibid., S. 140.
- ⑧ Wolfgang Benz, *Etappen bundesdeutscher Geschichte am Leitfaden unterlegter deutscher Vergangenheit*, in: Brigitte Rauschenbach, (Hg.), *Erinnern, Wiederholen, Durcharbeiten. Zur Psycho-Analyse deutscher Wenden*, Berlin 1992. Norbert Frei, *Von deutscher Erfindungskraft. Oder: Die Kollektivschuldthese in der Nachkriegszeit*, in ders., 1945 und WIR. *Das Dritte Reich im Bewußtsein der Deutschen*, München 2005.
- ⑨ http://www.dhm.de/lemo/html/dokumente/jahredesAufbausInOstUndWest_erklaerungAdenauerRegierungserklaerung1949/index.html
- ⑩ Herry Stein (Hg.), *Konzentrationslager Buchenwald 1937-1945*, Göttingen 1999, S.224-226.
- ⑪ Ibid., S. 78, S. 237.
- ⑫ Vgl., Jürgen Wilke, u.a., *Holocaust und NS-Prozesse. Die Presseberichterstattung in Israel und Deutschland zwischen Aneignung und Abwehr*, Köln, Weimar, Wien, Böhlau 1995, S. 121. 「ホロコースト」 藤嶋ひさし『Norbert Frei, Auschwitz und Holocaust. Begriff und Historiographie, in: Hanno Loewy, (Hg.), *Holocaust: Die Grenzen des Verstehens*, Reinbek bei Hamburg 1992.
- ⑬ Peter Novick, *Nach dem Holocaust. Der Umgang mit dem Massenmord*, Stuttgart, München 2001, S. 150f.

- ⑦ Harald Welzer, *Die Bilder der Macht und die Ohnmacht der Bilder. Über Besetzung und Auslöschung von Erinnerung*, in: Ders., (Hg.), *Das Gedächtnis der Bilder. Ästhetik und Nationalsozialismus*, Tübingen 1995.
- ⑧ Robert H. Abzug, S. 144.
- ⑨ Peter Seewald, <Gruess Gott, ihr seid frei>; Passau 1945, in: Wolfgang Malanowski, (Hg.), 1945. *Deutschland in der Stunde Null*, Reinbek 1985, S. 117.
- ⑩ Vgl., Wolfgang Jacobmeyer, *Jüdische Überlebende als "Displaced Persons"*, in: *Geschichte und Gesellschaft*, 9, (1983).
- ⑪ Koppel S. Pinson, *Jewish Life in Liberated Germany. A Study of the Jewish DP's*, in: *Jewish Social Studies*, Vol. IX, No.2 (April 1947), P. 110.
- ⑫ Ibid., P. 114-118.
- ⑬ 拙稿「社会主義国家の建国神話—『戦艦ポチョムキン』から『ゲッバイ・レーニン!』まで」高橋秀寿・西成彦編『東欧の20世紀』人文書院、2006年を参照。

(本学文学部教授)

ホロコーストの物語——占領期における記憶と表象 (写真1)



写真1



At Northhampton bodies of about 2,000 slave laborers are laid out along a bombed street, before burial by U.S. troops. These died while working at the Northhampton underground factory which made parts for V-1 and V-2 bombs. The plant was started in September 1943 and its closing has probably cost the lives of 30,000 slaves who died from starvation, overwork and beatings.

36

写真2



In vier Reihen von Holzverschlägen haben die Lebenden keinen Raum, sich zu bewegen, oft auch nicht einmal die Kraft dazu.

写真3



A SMALL BOY STROLLS DOWN A ROAD LINED WITH DEAD BODIES NEAR CAMP AT BELSEN

37

写真4



写真5

Diese Schandtaten: Eure Schuld!

Ihr habt ruhig zugehört und es stillschweigend geduldet.

Das ist eure große Schuld - ihr seid mitschuldig für diese grausamen Verbrechen!

写真6